

友の会事業活動から

友の会35年を振り返って

鬼塚満壽彦友の会代表世話人に聞く

インタビュー：世田谷美術館 村上由美（学芸部普及担当マネージャー） 矢野進（学芸部美術担当マネージャー）



世田谷美術館友の会の立ち上げに尽力された鬼塚満壽彦友の会代表世話人に、35年にわたる代表としての想いを伺いました。

—美術館設立から友の会発足までどのような経過だったのでしょうか。
昭和60年頃でしたか、まだ私が世田谷区立尾山台小学校の校長として現職の時、当時、世田谷区では教育センター設立と、群馬県川場村と区民健康村の提携の話が浮上していて、私も教育センターや川場村予定地の実地調査に参加したりしていました。その頃、同時に美術館設立の動きも出ていたのですが、美術館設立準備会には、美術の教員だった私も依頼されて何回か話し合いに参加しました。世田谷美術館との長いお付き合いの発端です。

友の会ですが、友の会をつくろうと言い出されたのは初代の大島清次館長です。大島館長が一所懸命に尽力してくださいました。理想の友の会を館長はつくりたかったのではないかでしょうか。美術館ができた年（1986年）の11月に準備会を発足させ、美術館より1年遅れで友の会ができました。私が強く主張したのは「友の会の会員は上も下もない。美を享受するという点ではみんな平等だ」ということで、それが友の会設立の主旨でした。ただ、お世話係が必要だからと、世話人会をつくりました。ここでも会長という名の人は要らないという考え方で、代表世話人としました。大島館長もとても喜んでくださり、友の会を大変尊重してくださったのです。

—美術鑑賞教室についてお聞かせください。

私は美術館ができたら鑑賞教室をやりたいと思っていました。絵画などの本物を子どもたちに観せるために美術館へ来て欲しい、印刷物ではない現物を見せて本物に触れて欲しい、そのため鑑賞教室をしたいと考え、校長会でも説得したのです。私がまだ現職で、校長会の副会長をしていた時でしたので、校長会でも「まあ、あなたが言うのなら」ということになりました。美術出身の校長が美術館との窓口になっていて、タイミングも良かったですね（注：鑑賞教室は昭和61年度に中学1、3年生と小学4年生を対象に始まりました）。小学5、6年生は学校行事が忙しいので4年生を対象としました。しかし4年生に企画展鑑賞は難しいかも知れないで、学芸員がしっかり指導するからということで始めました。最初のうちは学芸員さん2人と私の3人で子どもたちにいろいろと話をしました。その後、子どもたちをサポートする鑑賞リーダーができたのですね。

—これまでの友の会の活動についてはいかがですか。

大島館長は、「友の会会員を大事にするというは区民代表であるからです」と言われていました。ですが、私は友の会は友の会、館は館で分をわきまえ一線を画すところがないといけない、私たちが枠をこえてはいけ

ないと思っています。大島館長も現在の酒井忠康館長も、どのような場合でも友の会を大事にしてくださっています。静岡県立美術館に行った時に、先方の友の会の方と随分話をしましたが、静岡県立美術館には友の会の部屋があると聞いた酒井館長は、天下の世田谷美術館に友の会の部屋がないのはおかしいと言って、つくってくださりとても助かっています。

友の会の存在意義は、美術館を支援することも、その一つであるとかねがね思っています。今までどのような支援をしてきたのか、まだできることがあったのではないかと最近よく考えます。ボランティア活動もいろいろしましたが、「大英博物館展—芸術と人間」（1990年）の時は約37万人という大勢の来館者で大変混雑しましたので、皆さん出てきてボランティアとして我がことのように手伝いましたね。

『ニュースレター』は美術館と友の会と一緒に編集し、発行しておりますが、美術館と友の会とのあいだに一体感が生まれ、とてもいい事業ですね。初めの頃の広報誌は友の会だけの単独で発行され、それも不定期でした。

—これからの友の会についてはどうお考えですか。

世話人会でいつも問題になるのは、会員をどうやってふやしたり、確保していくかなんです。これまで関心の高い企画展の時は多くの人が集まってくるため、会員になってくれる人が多かったので、そういう企画を美術館が開催してくれるというのが一つです。次に友の会が企画する講座などの回数が限度くらいになっていて世話人が音を上げるくらい忙しい。会員さんが主役だから会員さんと一緒にみんなで作り上げようと言ひながらもうまくいかないのは、まだ私たちの努力が不足なのか、浸透のさせかたが悪いのか、ということです。

それから若い人を集めたいのですが、若い人は所属するのが嫌だけれど仲良しクラブならいいみたいで、だから友の会も仲良しクラブにしてもいいのではないかと思うのですけど、仲良しクラブで何をするんだということにもなる。ホームページ委員会でも大分考えてくださっていますが、ネットの時代ですから、それも大事なのかも知れないと。



世田谷美術館開館30周年を記念して友の会贈
ヒメシャラの鉢入れ式 2017年3月24日
酒井館長（左）鬼塚代表（右）

構います。小学校の時、この美術館を設計した建築家・内井昭蔵さんの展覧会（2009年）を見て、建築家になるんだと言って頑張って建築家になった子もいます。ここに来たことによって刺激を受けたとか、本物を見たとかで、みんな美術家になれるということではないけれど、美術や文化を生活の一部にするくらいのゆとりある人間になって欲しいと思いますね。そういうことに、友の会も関わっていかないといけないですよね。

子どもたちが美術館に来てくれれば非常にありがたいですが、今は、いつでも子どもも入場無料とはなってないですね。無料にするのはなかなか難しいかもしませんが、裾野を広げる、それが将来的には友の会の発展につながっていくのではないかという気がするのです。友の会が主体になって子ども向けのイベントを企画するのもよいかもわかりませんね。

（文責／友の会広報部）

友の会講座 浦辺佳奈枝講師に聞く

浦辺佳奈枝先生は東京都ご出身。東京藝術大学大学院絵画科版画研究室修了後、版画工房で研鑽を積まれ、個展を開催。また日本国内、アメリカ、フランスの作品展やイベントに出展しておられます。世田谷美術館で3年間講師をされ、2008年からは世田谷美術館友の会銅版画講座の講師をお願いしております。



Q1. 大学で当初油絵を学ばれて、その後に銅版画を専攻されました。

一言でいうと、銅版画の魅力は何ですか？

白と黒の世界、精密で繊細、黒色の幅が無限にあり覗き込みたくなるような画面が生まれるところです。

Q2. 銅版画制作の醍醐味は、どんなところだと思いますか？

思った通りにいかないところ。

Q3. 作品に込められている“テーマ”或は“思い”についてお話しください。また、頭部が動物の人物を繊細に描かれますが、その理由もお教えください。

作品のテーマは「人間」です。ずっと身の回りに居る人や私の心の中の人を描いています。また「人体」の存在感を模索したいとも思っています。人の顔は多くの信号を発信していて、ある時私にとってノイズに感じました。その時から動物（家畜、生きているのに個を抹殺された存在）を頭部に描き始めました。最近では意識が少し変わり「人間（人体）の内部」を表現しようとエコルシェを部分的に使って描いてみています。「存在する物質的な人間」「そこにある、そして思考する」「意識と存在感」など人に対するそのような感覚を表現出来たら……と思っています。まだまだこれからです。

Q4. 講座で「銅版画には失敗がありません」とおっしゃいますが、その心をお話しいただけますか？

講座では初めての方も多く、失敗を恐れてなかなか手が動かない人に對してそう言っております。実際に、取り返しのつかない失敗というもの

はあまりなく、大抵の場合はリカバリー可能です。そして、失敗したと思った箇所が最終的にいい味わいや、修復しようとして手数を入れることによるテクスチャの厚みが増す結果になったり……と、可能性が無限にあると思っています。版画は版を紙に刷りとてそれが作品になります。工程を多く踏むことで、思ってもみない効果や表現が生まれます。そういう意味で、「失敗」というものはあまりないと思っています。

Q5. 長年友の会の講師をされていますが、ご感想をお話しください。

やはり多くの方々と出逢い、中には毎年受講してくださる方も多く、講座は本当に楽しいです。色々な方のお話を聞いたり、毎年私にとっての刺激にもなっており、とても大切な機会だと感じています。

Q6. これから世田谷美術館友の会の銅版画講座に対する思いをお聞かせください。

銅版画は施設がないとなかなか出来ない版種です。世田谷美術館の創作室はとてもよく考えられたいい設備です。是非多くの方々に銅版画に触れてほしいという思いです。一度経験してみると、次に銅版画や他の絵画、美術作品を観る時の意識が、少し変わってくるかもしれません。また講座の間はどんどん講師である私に頼ってください。一緒に素晴らしい作品を作りていきましょう。

（インタビュー／友の会事業部、広報部）



《オブラ》エッチング、アクアチント



《まっすぐに立んだ》ドライポイント

思い出の美術館

DIC川村記念美術館

佐倉に美術館があるんだ。どんな所かなあと軽い気持ちで行きました。それがDIC川村記念美術館でした。

まず驚いたのが広々したヨーロッパ庭園。それと洗練された重厚な建物。庭には現代彫刻があちこちに展示されています。僕にとって美術館は知らない世界へ誘う場所と思ってます。

そういう意味ではここではエントランスで心躍りました。企画展も興味深かったです。確か文学と美術の接点みたいのを企画していました。レンブラント、モネ、ルノワールなど有りますが、ここは現代美術が充実しています。いろいろ有りますが、私は「ロスコ・ルーム」が印象深かったです。その頃、私は現代美術を解ったような解らない状態でした。その部屋には誰もいません。ただ一人でマーク・ロスコの作品7点と対峙しました。

瞑想のような独特な空気は意識の領域に無意識が入ってきたようで不思議でした。時間の概念もなくただただ感じていました。ああこれが見るより感じると言ふことなのか……。

好奇心を満たし自分の存在とは何かを考えながらのフワフワな帰路になりました。美術の楽しみ方を自分の内面に広げてくれた思い出の美術館です。



みんなのギャラリー

《向日葵》——終戦記念日に寄せて——

程島けい子

この八月、戦争を語る番組を何本か視た。初めは無言館、次は丸木夫妻の《原爆の図》である。見ていて切ない程限りある生命を前にして描いている時の真摯な思いや熱情が伝わってきた。

そして今日。15日。急に向日葵を——明るさと強さの中で、生き物の業としての哀しさ、弱さを内包している向日葵を——描きたいと思つた。

コロナの先の見通せぬ不透明な社会だからこそ、どんな状況であっても、人間本来の生き抜く知恵と耐力をもち、時には立ち向かい、時にはやり過ごし、強さと柔軟さをもった向日葵を描きたい。明るい色彩の中に頑として存在している向日葵を画面一杯に咲かせ、それでも何か心もとなさと意思を感じさせる私の向日葵を描きたいと思った。

描きあげた一枚の絵が一人立ちして、私にエールを送ってくれたらと思う。



世田谷美術館広報担当 力丸彩子さんに聞く

昨年11月から世田谷美術館の広報担当として勤務されている力丸彩子さんにお話を伺いました。



Q1. 美術館で仕事をしたいと思われたきっかけは?

大学生のときに初めて行った海外旅行で、ルーヴル美術館のキュレーターによる3日間のレクチャー・ツアーに参加し、そこでキュレーターの仕事に出会い美術館で働いてみたいと思いました。大学は美術史専攻ではなかったので、美術史の勉強は自分でして学芸員の資格を取りました。茨城県出身なので帰省したときに笠間日動美術館でアルバイトをしました。そのご縁で、卒業後は笠間日動美術館で学芸員として4年間働きました。

Q2. その後は?

出版関係の仕事をしたことがきっかけで図書館司書の資格を取り、その資格を生かして国立新美術館の情報資料室に5年、その後は国立能楽堂の図書室と法政大学能楽研究所に8年ほど勤務しました。ただ、大学の研究所は研究者の方との接点しかなく、なんとなく寂しく物足りなく感じるようになり、一般の利用者が来る文化施設で働きたいと思って、せたがや文化財団の仕事に応募しました。

Q3. 広報のお仕事にはどんなことがあるのですか?

一番時間を割いているのは世田谷区民向けの情報紙の編集とホームページの更新です。また展覧会の情報をマスコミにお知らせし、作品画像の提供、取材申込の対応や調整、掲載原稿を展覧会の担当者に確認してもらうといったメディア対応もしています。年間予定表やニュースレターの作成準備が始まると学芸員が執筆した原稿の取りまとめもしています。

Q4. ホームページの「世田美チャンネル」制作のご苦労話は?

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため美術館が休館していた時期、家で自粛している方に今美術館はどんな感じかをお伝えできたらいいなと思いました。初めての試みで、動画制作の経験もなく手探りでしたが、学芸の皆さんにご尽力いただいて制作しています。7月までは週一回のペースで公開していましたが、今後も同じペースで公開できるかは難しいところです。ただ制作は専門業者に頼まず、美術館の人間で作る手作り感の良さは残していきたいと思っています。まだ安心して来館できない方も沢山いらっしゃるので、展覧会以外の美術館の活動も「世田美チャンネル」を通して紹介していきたいです。

Q5. 今後手掛けたいことは?

これまで展覧会を観に来てくださいと伝えることが広報の一番の仕事だったと思うのですが、今しばらくは実際に来館されない方にはどう美術館の魅力を伝えていくか、だと思っています。今はブログと「世田美チャンネル」だけですが、インターネットを見られる方ばかりではないので、ほかの手法でも考えています。今まで展覧会の開幕に合わせたタイミングで広報をしていましたが、世田谷美術館にいつか行きたいなと思ってもらうことも広報の一つだとすれば、展覧会の情報発信だけでなく、様々な場面で美術館を紹介していくことが必要かなと思います。また、まだまだ紙の媒体も大事で、紙でしか伝えられないこともあるので、雑誌といった紙媒体とホームページや動画をうまく使い分け、多様な広報を展開していきたいと考えています。

Q6. ご趣味や好きな絵、画家は?

週に1回子どもとボルダリングをしています。多分、性に合ったのだと思いますが、良い気分転換です。好きな画家は佐伯祐三、東京国立近代美術館所蔵の『ガス灯と広告』が好きです。（インタビュー／友の会広報部）

*「世田美チャンネル」は美術館HPメニューのブログからご覧になれます。

アートライブラリー通信

カタログ・レゾネのお話

皆さんは、美術に関する情報について知りたい時どのように調べますか？特定の作家について深く調べる時に有用な資料の一つが、カタログ・レゾネ(catalogue raisonné 以下、レゾネ)です。

レゾネとは、特定の作家やコレクションの全作品のデータを網羅的に集めた作品総目録のこと、仏語で「論理にかなった」という語源を持ち、制作年代順の作品情報や展覧会歴、文献一覧などが記されています。作家の全貌を見渡しやすく、また、作品の真贋判定に使われる資料もあります。レゾネと一緒に言っても、図版が充実したもの、情報に重きを置いたものなど形式は様々。また、作家によっては年代や分野を分けていたり、タイトルが「レゾネ」ではなく「全作品」と表記されていたりすることも。

気になる作家のレゾネ、見たくなりませんか？例えば、今夏、当館で開催予定だった「麻生三郎展」。その麻生のレゾネ（麻生マユ編『麻生三郎全油彩』中央公論美術出版、2007）、あります。判明している約千点の油彩全作品情報が記され、カラー図版も豊富。また、酒井館長によるエッセイも収録されています。

残念ながら高価ゆえ作家のレゾネがそう多く收藏されているわけではありませんが、大型本コーナーでご覧いただけます。丹念な調査の上で編纂された研究書であるレゾネを手がかりに、探究心をさらに高めてみてはいかがでしょうか。

（世田谷美術館学芸部司書／須藤美麗）



お知らせ

碓井恒夫さんが新しく友の会監事をお引き受けくださいました。

これから事業予定

◎彫刻鑑賞講座 11/10(火)・11/17(火)・11/25(水)(全3回)

◎スペシャルな美術講座

第1回 12/5(土) 橋本善八 世田谷美術館副館長兼学芸部長
「美術館の仕事ってなんだろう？」

第2回 12/12(土) 酒井忠康 世田谷美術館館長
「私と美術館」

*友の会会員の皆様には、事業のお知らせを郵送いたします。

「編集後記」

・世田谷美術館のご協力を得て鬼塚代表インタビュー「友の会35年を振り返って」並びに「アートライブラリー通信」を掲載することができました。ありがとうございました。

・募集！「アートライブラリー通信」で須藤司書からご紹介のあった本や皆さまお薦めのアート本の読後感想文(400字以内)をお寄せください。宛先は友の会事務局です。お待ちしています。（友の会広報部）

世田谷美術館友の会に入会しませんか！

会員は世田谷美術館と分館の展覧会が年間無料で観覧でき、会員限定のイベントや実技講座への参加、友の会作品展への出品ができます。



お問い合わせは友の会事務局へ
詳細は入会案内やホームページをご覧ください。

tel.03-3416-0607

<https://setabi-tomonokai.jp/>